

「ひとごと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

鳴門市人権地域フォーラムは、「ひとごと」から「わがこと」へをテーマとして、毎年「学習者が学習者を変えていく人権学習」を実践する場となってきました。今年度は、板野中学校で、学年・学校全体で語り合う人権・部落問題学習(全体学習)を体験してきた3人のパネリストに登壇していただきます。

語り合い人権学習で中学生に常に問うてきたことは、「本音で語り合う」ことでした。言い換えれば、自分の中にある本当の思いを素直に伝えること、表現することです。これは、そうなることを願いながらも、なかなか実現できるものではありませんでした。では、どうすればそれが可能となってきたのか。

答えはシンプルでした。「教師が本音を語る」です。「こんなことは絶対人に言うことはない」と思ってきたことをまず教師から語っていったのです。それは、「教師が解放されずに、子どもたちが解放されることはない」との考えからでした。

「プライベートな問題だから」と言って、ありのままの自分を殻に閉じ込める風潮があります。でも、そうすることで、人はどんどん孤立していきます。その殻を敢えて突き破ることによって、自己を解放していく姿を、子どもたちに伝えていきました。その教師の姿を通して、子どもたちもありのままの自分を語っていきました。本音を語りはじめました。自分の中にある本当の思いを素直に伝えること、表現することの大切さに気づいていったのです。

すると変化が起きました。自分の未来を、仲間の未来を、共に描いていこうとする力強さに満ちていったのです。生き方が変わっていったのです。それは、子どもたちの未来が変わることでもありました。私たちの周りは、まだまだ解放されない現実で溢れています。そんな現実を変えるためにも、本気の人権教育が必要と考えます。そんな「みんなで語り合う人権学習」が広がっていくことを願い、その必要性や有効性を伝えるため、2019年秋、T-over人権教育研究所を設立し取り組んでいくことにしました。

T:たがいにーover:越える T:ともにーover:越える Talk over:じっくり話し合う

パネリストの語りやに寄せて、参加者の皆さんと語り合い、部落問題を「ひとごと」ではなく「わがこと」として捉え、部落差別解消への営みを確かなものとしていく人権学習を共に創造していければと思います。そして、私たち一人ひとりの人権意識を高め、すべての人々の自己実現を可能にする人権のまちづくりをめざしていきましょう。

2020年

日時

8月21日 **金**

受付13:00 / 開会13:30

場所

うずしお会館 2F第1会議室
(鳴門市消防署東隣・旧鳴門地域地場産業振興センター)

コーディネーター

森口 健司 (T-over人権教育研究所共同代表)

パネリスト

吉成 正士 (T-over人権教育研究所共同代表)

井上 浩司 (1991年度板野中学校卒業生・大学事務職員)

村山 直子 (1996年度板野中学校卒業生・臨床心理士)



▲1994年11月25日(金) 第46回全国同和教育研究大会徳島大会前日に公開した板野中学校の全体学習の様子

※新型コロナウイルス感染症対策のため、内容変更、または中止になる場合がございますがご了承ください。

中止の場合には、鳴門市公式ウェブサイトでご案内いたします。

※当日午前7時の時点で、鳴門市において暴風警報・特別警報が発令中の場合は中止となります。

主催/鳴門市・鳴門市教育委員会・鳴門市人権教育推進協議会

共催/松茂町人権教育推進協議会・北島町人権教育推進協議会・藍住町人権教育推進協議会・板野町人権教育推進協議会・上板町人権教育推進協議会

後援/徳島県教育委員会・徳島県人権教育研究協議会

お車でのご来場の際は、鳴門市役所共済会館南側駐車場をご利用ください。

パネラーからのメッセージ

「みんなで語り合う人権学習」がもたらすもの

T-over人権教育研究所共同代表 吉成 正士

中学生と「みんなで語り合う人権学習」に取り組んできて私が密かに思うこと。

- ①人権学習を進めていけば、学力が上がる
- ②人権学習を進めていけば、人と関わる仕事に就く割合が高まる

これが、私の実感。本当にそうなのか、なぜそうなのか。

みんなで本音を語り合うことで、人を知り、その人が大切に思えてくる。それは翻って自分を知り、自分が大切に思えることにつながる。そして、話し合いに必ずと言っていいほど出てくるテーマ、「どう生きるのか」。これらが絡み合った結果として、自分の定めた目標に向け、仲間とともに真摯に努力しようとする人間が形成されていくのではないだろうか。

今回はそんな話をお聞きいただければと思います。

全体学習は、学校の『年輪』となって仲間の輪が続いていく

1991年度板野中学校卒業生・大学事務職員 井上 浩司

1990年度、中学2年の時に、学年全体で部落問題について語り合う人権学習(全体学習)に出会いました。中学2年、3年と、板野中学校の仲間と部落問題について語り合った学習が、その後、部落差別の現実を乗り越えていく力になっていきました。

この全体学習は、一人の先生がきっかけで始まったかもしれませんが、当時の校長先生から生徒に関わるすべての先生にいたるまで、いろいろな試行錯誤の中でつくられてきたのではないのでしょうか。先生方も生徒から何かを感じ、発信したからこそ、他校からも多くの先生方が、見学に来るようなすばらしいものになっていったように思います。その学年が卒業したり、先生が他校に移っても、新入生が入り、新しい先生が入って、全体学習が続いていけば、それは、その学校の『年輪(ねんりん)』(当時の学年通信の名称)となって「仲間の輪」が続いていくような気がします。

全体学習を通じて得たものと今に生きるもの

1996年度板野中学校卒業生・臨床心理士 村山 直子

今回、このような機会をいただき、自分の今の日常と、あの頃とのつながりを振り返って考えるようになりました。思いの外、あの頃と今の日常は繋がっていました。むしろ、本質的なところは、あの頃に体感したことと変わらないように思えました。

私は、日々、そんなキラキラした生活は送っていません。時にもがき、涙し、自分が嫌いになり、そんな自分を信頼できる人にさらけだし、そんな自分を引き受けながら生きています。日常で時に顔をだす、感情のひっかかりを、もやとした感情を、気づけば、ひたすらに考えている。これは私の中の差別じゃないのかと…。

私の中にあるものと、あの頃とを、あの頃のように出す、そんな時間になれば、いいな。楽しみです。

座席は150席予定しております。新型コロナウイルス感染症対策のため、収容人数を超える場合は入場を制限させていただく場合がございますのでご了承ください。

お問合せ：鳴門市教育委員会生涯学習人権課 ☎088-686-8804